

◇3・11から 東大教授 玄田有史氏に聞く 屈しないことも、希望【原文提供不可】
◎東京新聞 2011年06月12日 朝刊◇2面 見出し4段 写



希望学は二〇〇五年度、東大の玄田有史教授らによって始まった。玄田氏は翌年度から岩手県釜石市で「希望」に関する調査を行ってきたが、震災後も釜石への支援を続けている。「釜石の希望」について玄田氏に聞いた。

東大教授 玄田有史氏に聞く



げんだ・ゆうじ 1964年、島根県生まれ。東京大卒。東大社会科学研究所教授。専門は労働経済学だが東大の中村尚史教授らと希望学に取り組み。現在は東日本大震災復興構想会議検討部会の専門委員も務める。

望とは何かを知るためです。僕は二一と苦者の問題にもかわってきましたが、彼らは能力や意欲がなくなるといふ以前に、希望を持てないように感じられた。希望について考えたいと経済、雇用も含めて社会全体が前に進まないと思いました。希望学を始め、希望を持つ人は過去に挫折体験を持ちました。格好いのですよ。

屈しないことも、希望

ち、それをぐぐり抜けてきた。立ち直った体験の両方があるのではよ。このことが、希望学に取り組み僕たちが釜石に入るようになったきっかけでもありま

希望は「細からばた餅」ではありません。この街で学びました。動いてもがいては、おまけに何かにつか。希望は過去の試行錯誤をみます。そこから出てくる探求でもあります。釜石は、うれしいこと

た。赤の他人の僕たちが過去の経験を真剣に聞いたこと、希望について考えるきっかけをつくり元気になるてくれたら、いい出会いだったと思います。震災から三ヶ月。釜石はまだ希望を話し合う状況ではありません。僕は震災後、二度釜石に入りましたが、かける言葉なんかありません。握りて話を聞いただけです。被災地の人にとって大事なものは、日々できる



3月16日 岩手県釜石市の青森通り



6月11日

何かを見つけて、淡々と日々と実現させていくことだと思えます。今回の震災は、釜石が過去に経験した試練とは桁違いに大きいから、立ち上がれないのではないかと、人がいます。私はどうは思いません。再生すると思いません。釜石の人は、あきらめが悪いんです。何でそこまでやるんですか」と聞くと「生まれた場所は選べないからな」と。あらがえない圧倒的暴力を目の前にし、それでも屈しないことも、希望です。釜石と隣接の大町町には人形劇「ひよこりひよたん島」のモデルとなった島があります。だからというわけではないでしょうが、苦しいことがあっても、悲しいことがあっても、主題歌の通り「だから僕らはくじげない」なのでしょう。亡くなった人もたくさんいます。でも、そういう方の分も全部含めて「泣くのは嫌だ 笑っちゃおう」ですよ。

(聞き手・金井辰樹)